同推協だより

No.135
2023年　９月発行
神前地区同和教育推進協議会
Email:kanzaki-do@m2.cty-net.ne.jp

最近「おかしいなあ」「どうしてかなあ」と思ったこと

わが家（６０代後半の夫婦）のちょっとした変化
夫が昼食後の皿洗いを、毎日、必ずしてくれるようになりました。エプロンをして、せっせと洗っています。共働きで、仕事、子育て、家事に追われていた若いころ、家事は当然のように私（女）の仕事でした。
あれから４０数年。家事の半分は夫が受け持っています。皿洗いの水の音を聞きながら、私は新聞を読んでいます。
時代と共に、わが家も変化しました。

尾平町　中山　豊子さん

名古屋市の「名古屋城バリヤフリーに関する公聴会」で、障がい者に対する差別発言がありました。テレビや新聞の報道を見たり読んだりしていると、「（障がい者だから）我慢しろ」というのです。こんなにひどい差別が、まだ公然と言われていることにびっくりしました。いっしょにテレビを見ていた中１の孫も、「なんてひどいことを言うのだろう。自分が障がい者になったときも、そう言えるのかな。」と言いました。その通りだと思います。もちろん自分の不注意の事故で障害を持つことになった方もみえますが、先天的に障がいを持って生まれた方は、自分から選んで障がい者になったわけではありません。その方々に、障がいを理由に「我慢しろ」ということは、「男だから〇〇するな。」とか「日本人だから〇〇するな。」とか「被差別部落出身だから〇〇するな。」といっしょの発想に思えます。そう考える人がまだいるということです。

名古屋城を建設当時（戦国時代）のように完全復旧するか、しないかなど全く関係なく、人が天守閣まで行けるようにするなら、全ての人が行けるようにすることが「普通」のはずです。
自分でどうすることもできない障がいや個性で差をつけることが「差別」だと、なぜわからないのでしょう。その方の発言を「差別発言」とすぐに指摘できない行政も情けないと思います。

地域マネージャー　吉田弘一さん

一人暮らしの家庭訪問を行っています。話をしてみますと、家でテレビを見たり、天気が良いと家の周りを散歩したりしているそうです。それと一週間に２回ほどデイサービスに行って、体を動かして来るそうで、その日は帰ってくると疲れて寝てしまうそうです。しかし、その時が一番の楽しみだそうです。未だコロナで、あまり家の隣の人や道で知り合いにあっても、話しかけたりしないで、顔を見てあいさつするぐらいだそうです。早くコロナが終わりになってほしいと言っていました。聞いているとなんだかとても寂しくなってしまいます。ただでさえ、一人暮らしなのに、さらにコロナで「独りぼっち」にさせられているようなのです。

私もその方が、以前のように隣近所の方々と大きな声で話ししたり、笑い合ったりできるようになってほしいと思い、せっせと家庭訪問を行っています。

民生委員　村山長敏さん（尾平町）

10月１日（日）人権講演会　林みち子先生のお話

講演をお願いした林先生から、プロフィールとしてお手紙をいただきました。
お手紙を読んでみると、ますますご講演が楽しみになってきました。ぜひ参加してください。

ホンネで話そう、生と性

助産師相談室　いのちのかがやき　林みち子

私は伊賀で生まれ育って47年、助産師歴25年目の開業助産師です。
助産師になって最初の８年間は、三重県伊賀市内の森川病院で分娩介助の仕事をしていました。この世に新しいいのちが生まれるとき、そのいのちに一番最初に触れることができる、そんなステキな仕事をさせて貰っていました。かつて私の手の中に、生まれて来てくれた800人余りの赤ちゃんたち。あの、いのちの温かさを私は一生忘れないし、忘れてはいけないと思っています。

私たちは、いのちの温かさを肌で感じるために肉体をもってこの世に生まれてくるのだと思います。そして子どもたちは、大好きな親の笑顔が見たくて親を選んで生まれてきてくれたのです。
だから子どもたちは、どんな時も親を裏切ることなく真っすぐに愛を届けてくれます。

赤ちゃんがこの世に生まれてきてくれるとき、赤ちゃんは自分のからだも、お母さんのからだも絶対に傷つけないように様々な工夫をして命がけでうまれて来ます。少なくとも、私が出会ってきた赤ちゃん達のからだには傷ひとつありませんでした。
･･･なのに、どうでしょう？成長すると、いのちの温かさも忘れ、簡単に自分や他人を傷つけてしまう悲しい事件が世の中に溢れています。
こんな時代だからこそ、ちゃんと知って欲しい。
ひとりひとりが、いのちの始まりから平等で、愛される価値と権利があるということを。
生きているだけで、100点満点なんだということを。

地球上には80億人以上もの人が暮らしているけれど、あなたのからだとこころは、この世でたった一つの宝物です。
だから、ぜひ大事にしてください。要らないいのちなんて、無いのだから。冷たくなったいのちは、二度と温かくはならないのだから。

助産師としての経験と、ひとりのお母ちゃんとしての目線を活かして平成22年７月に伊賀市山出の自宅に助産所を開業しました。ひとが笑顔のとき、そのひとのいのちが輝くとき。私は出会った人が笑顔になれるようなお手伝いをしたいと願って助産所の名前を「いのちのかがやき」に決めました。今は主に産前産後のお母さん達のからだとこころの悩み相談や母乳育児相談、保育園児から大人に向けて性教育の仕事をしています。

今日、出会えたあなたにも「ただしい人生」以上に「たのしい人生」を歩んで欲しい。だってたった一度の人生だから。そんな想いで助産師だからこそ伝えられるいのちの話、生きる話を一人でも多くの方に聴いていただければ嬉しいです。

人権フェスタの人権劇は、最高の啓発活動でした。

６月１１日（日）、神前小学校体育館で、「第２１回人権フェスタかんざき」が行われました。

今回は、神前同推協設立５０周年記念も兼ねて行われました。当日は、約２２０名の方々の参加を得て盛大に行われました。

近藤会長のあいさつ、山内県議、川村市議のごあいさつに続いて、今年のメインである「劇団でこぼこ」による「人権劇」の公演がありました。

中学生の「水平社宣言」の朗読に始まり、懇談会の昨今の様子や人権学習の様子、それぞれの決意表明。そして神前同推協設立のきっかけとなった「寺方帰れ事件！」。全てが全員素人とは思えない素晴らしい公演でした。出演者全員の想いと願いの結集だと感じられました。

【参加者の感想（アンケートより）】

１０代　寺方で実際にあった人権差別。人権劇を見て初めて知りました。こんな人権差別はあってはならないと思いました。

２０代　とても分かり易く、みなさんの熱意が伝わってきました。どうしたらみんなが住みよい町になるのか。たくさんの人が関心を持っていくことが大事だと改めて感じることができました。

３０代　差別は昔の事なんかではない。差別する人がいるから残っているもの。でも、自分はどうなん？今回参加させてもらい再確認させてもらいました。「このままでいいの？」という訴えを聞いて、なくしていくのは誰なのか、考え続けていきたいです。

４０代　たくさんの方が、子どもから大人まで人権劇に参加していて、改めて人のつながりを大切にしている町に住んでいると感じました。

５０代　どこの地区でも次世代への継承が課題になっています。そんな中、神前は子どもや若い世代が一緒になって「差別をなくす活動」をしていると感じました。

６０代　「寺方帰れ事件」について、少し前まで「古くなったなあ」と思っていましたが、今日改めて劇を見て、「もう一度振り返らなければならないことがまだまだあるなあ」と思い直させてもらいました。「今」の中にひそんでいる「差別」をいかに見えるものにするか、考えて行きたいと思いました。

７０代　一人一人を大切にすること、人権尊重のまちづくりが根付いています。違いを認め合い、相手のことを思いやるこの心は、最も人間らしく、最も自分らしい生き方だと思います。これからも、これまでつなげてきた精神を守り育ててください。

８０代　５０年前のことを思えば、差別への理解は進んでいると思います。

多くの方々の心に、様々な思いや課題を残してくれました。これこそ最高の啓発活動だと感じます。一人一人が自分を振り返り、自分の差別心に気づくきっかけになってこその啓発活動だと思います。劇団でこぼこのみなさん準備から本当にご苦労様でした。ありがとう。

「差別は今もある！」　夏の啓発委員研修会を実施！

４年間短縮して行ってきました、地区同推協の啓発委員研修が始まりました。（このたよりが発行されるときは終わっていると思います。）

第１回の研修会が７月２０日、２１日に寺方児童集会所で行われました。今年は原点に立ち返って、第１回目は、「部落差別は存在する」ことを、反差別・人権研究所みえ（ヒューリアみえ）の原田朋記さんによって、「科学的調査」と「具体的な事実」を基に明らかにしてもらいました。それは、「憶測で判断すると間違った認識が創り上げられてしまう」からです。良く懇談会で、「部落差別なんかないんじゃない。実感ないよ。」という声が聞こえてきますが、それが間違いだと証明されました。差別はあるのです。ここが神前同推協の「差別をなくす活動」の出発点なのです。

差別の芽はみんなが持っています。そして、その芽に気づかず、摘み取ることができないと、差別をする人になってしまいます。

自分自身を振り返って、差別の芽はないか、それはどんな時にひょこっと顔を出すのか、を見極めることで、少しずつその差別の芽を失くしていくことがきると思います。そのきっかけとなる場所が、地域や団体の懇談会です。

自分の想いを話したり、人の想いを聞いたりすることで、結果、自分を見つめることができます。この秋は、全町で地区・団体懇談会を開催していただき、啓発委員さんを中心に「自分のこと」を話し、差別を「自分事として」考える時間（懇談会）を持ってほしいと思っています。

人権カルタコーナー　今月の１枚！

偏見を
親切心で
伝えられ

差別の始まりは「親切」からかもしれません。「この子のために、この人のために」と思う心が、差別を継承させます。親切だから、やめることはありません。誰かが気づいて勇気をもって止めるしかないのです。そのために、学び、話し合います。そして最後は「差別をなくすための勇気ある行動」ができるかどうかにかかっています。仲間を信じ、動き出しましょう。

人権カルタとは？

２００１年、同推協の一般公募啓発委員研修会で人権標語を作りました。その標語を「かるたを作ろうチーム」を募ってカルタに仕上げました。この啓発かるたは、

① 啓発委員の役割、

② 差別が表れる場面を描いたもの、等

人権・同和問題の解決を願って、「みんなで考え行動しよう。」と呼びかけています。

同推協啓発委員募集中

啓発委員になっていただける方は市民センターロビーに設置してあるポストにお名前を記入して投函してください。（申込用紙は置いてあります。）お電話でも、ＦＡＸ、メールでも構いません。啓発委員になっていただければ委員研修やイベントに参加したり、同推協の活動内容のお知らせを送らせてもらったりします。

【問合せ先】神前地区市民センター内　団体事務局　℡・fax 327-1501（受付午後）
Email：kanzaki-do@m2.cty-net.ne.jp